

講演 3

地域研究で考えるリアルなアジア

東南アジア地域研究研究所准教授 中西 嘉宏



こんにちは。よろしくお願いいたします。中西です。

皆さん、少し疲れているように見えますが、大学の授業は大体1コマ90分ですので、30分の講演3本分ですから、大学での授業の練習だというふうに思っただけであればいいかなと思います。

私の話は、前に話された2人の先生方とは、全くと言っていいぐらい毛色が違います。私は、自然科学の研究者ではなくて、社会科学の研究者です。しかも、社会科学の中でも若干特殊な研究をしているものですから、これまでとは頭を切り換えて聞いていただければいいかなと思います。

私の専門分野を簡単に説明しますと、政治学というのが専門になります。特に東南アジアの政治の研究をずっとしてまいりました。軍隊の政治的役割だとか政治政党の活動だとか、先ほどの紹介にあったとおりで、いろんなことを研究してきたわけですが、きょうお話ししたいのは、もう一個の専門分野のほうで、政治学とともに、地域研究というアプローチで研究をしています。

地域研究というのは、大変定義が難しいんですが、主に科学が普遍的な原理、ある一定の条件の中で、一定のメカニズムで何かの現象が起きるということを突き詰めていくとすると、地域研究は、社会現象の固有性、その土地固有の現象というものを探り出していこうと、そういうアプローチです。普遍的な原理と現象の固有性、両方を見ながら、バランスよく科学というのは発展していくと思うんですが、どちらかというと、固有性により焦点を当てた研究になります。

地域研究における地域というのは、研究者ごとに違って、広かったり狭かったり、国だったり、特定の村だったり、いろいろするわけですが、私の場合は、広くは東南アジア、なかでもミャンマーの政治についてこれまで研究してきました。

簡単に所属機関について説明しておきます。私は東南アジア地域研究研究所というところ

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

専門分野と所属

- 政治学
 - 東南アジアの政治現象の考察
 - 軍隊の政治的役割、官僚機構の発展過程、民主化をはじめとした政治変動などを研究
- 地域研究
 - 「普遍的な原理」より「地域的固有性」に着目する
 - 地域とは国だったり、より狭かったり、広かったり
 - 私の場合は東南アジア、なかでもミャンマー

2

ろに勤めています。この1月に2つの研究機関（東南アジア研究所と地域研究統合情報センター）が統合されてできました。私が所属していたのは、そのうち東南アジア研究所でありまして、東南アジア研究所というのは、1965年に東南アジア研究センターとして設置されて、それ以来、東南アジアを研究対象に人文、社会、自然科学の専門家が学際的な研究を進めてきました。

例えば、経済学部というと、経済学の専門家がたくさんいるわけですが、東南アジア地域研究研究所は特定分野の専門家がたくさんいるような研究所ではないです。東南アジアで調査をしている、研究をしている、いろいろな専門家の方がいます。私の場合は政治ですが、経済学者もいますし、農学、工学、医学、歴史、文化人類学といった専門家が所属しているわけです。大体30人ぐらいの常勤の研究者がいて、所属している研究者全員を集めると100人規模になるような研究所で、外国人も多く、国際的な研究所です。

きょうの話は私の研究そのものというよりも、皆さんに地域研究で何がわかるかということを示せばなと思って準備をしてきました。

最初に、東南アジアって、どこやねんという話からします。多分、全くわからないという人もいるのではないかと思います。

地図を示しますと、中国、インド、日本というのは、わかりますよね。この間のこの辺のことを東南アジアと言います。東南アジアには、11カ国の国があって、フィリピン、ブルネイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、東ティモール、ベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマーです。中には、行ったことのある国もあれば、今初めて国の名前を聞いた人もいるかもしれません。

人口規模でいうと、中国は14億人、インドは13億人に対して、東南アジアは全部合わせて6億人ぐらいです。

経済規模でいうと、中国9兆ドル、東南アジア2・5兆ドル、インド2・3兆ドルです。あまり細かい数字にこだわる必要はなくて、経済規模として、中国は東南アジアよりずっと大きいけど、東南アジアとインドの経済規模は近いかな程度でよいです。

ただし、注意したいのは、さきほど見た人口規模だと、東南アジアはインドの半分よりも少ないので、1人あたりの経済水準を見ると、東南アジアのほうがインドよりやや豊か

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

東南アジア地域研究研究所

- 東南アジアおよびその周辺地域を総合的に研究することを目的として設立（1965年）
- 東南アジアを研究対象にした人文、社会、自然科学の専門家が所属して、学際的な研究を進めている



2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

東南アジアの11カ国

	フィリピン		ベトナム
	ブルネイ		カンボジア
	マレーシア		ラオス
	シンガポール		タイ
	インドネシア		ミャンマー
	東ティモール		

かな、ということになります。しかし、中国ほど豊かではない。そういう地域だと思ってください。ただし、東南アジアといっても、国によってずいぶん違いがあります。シンガポールなどは、日本よりも数字上は豊かであったりします。

次に、じゃあ、東南アジアって日本と関係あるのか、という話になると思うんですが、大いに関係があります。いま、関係性がますます深まっています。

この表は、日本人で東南アジア、東アジアに住んでいる人の数を示したものです。在留邦人として登録された人たちの数なので、これよりも実数は多いかもしれません。1位は

日本からアジアへ	
国名	在留邦人数
中国	131,161
タイ	67,424
韓国	38,060
シンガポール	36,963
マレーシア	22,774
台湾	20,162
インドネシア	18,463
フィリピン	17,021
ベトナム	14,695

外務省「海外在留邦人数調査統計(平成28年要約版)より

もちろん中国で、13万人の日本人が住んでいます。2番目はタイです。6万7000人。3番目に多いのが韓国で3万8000人です。続いてシンガポールが3万6000人と、ほとんど韓国に住んでいる日本人とかわらない数の日本人が住んでいます。

今東南アジアに進出している企業はたくさんありますので、ここにいる学生さんたちも、近い将来就職して、理系文系関わらず、東南アジアや中国、韓国で仕事をするという可能性は十分にあります。

逆に、東南アジアから日本に来る人たちも増えています。このスライドは東南アジアからの訪日数を示したのですが、タイ、シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、ベトナム、インドからの訪日者数が示してあるわけですが、全体的に増えているのはわかると思います。なかでも増えているのがタイです。金沢も京都もそうですが、タイ語を耳にする機会、僕はタイ語の音はわかるので、何となくタイ語をしゃべっているのはわかるんですが、タイ語を聞く機会が増えました。増えている理由は、昔は日本政府からヴィザの発給を受けないとタイの人は日本に来られなかったんですが、今はヴィザなしで航空券とパスポート、今安い航空券だと3万円、4万円ぐらいで日本往復できたりします。円安で日本での滞在費用が下がっていることもありますね。

観光客だけじゃなくて、介護の分野だとか、あと農業だとか、いろんなところで、東南アジアの人たちが働くような社会になってきています。今後ますますその傾向は強まるでしょう。外国の話としてだけでなく、私たちのこれからの社会のためにも、東南アジアのことを理解する必要があるわけです。

これまでは何となく、日本だけはアジアの中では特別な国だというふうな感覚が日本人にあったように思いますが、もうそういう時代ではありません。アジアはより一体になってきています。日本はアジアの一部なんだという感覚を持つことがすごく重要になっていきます。

それにもかかわらず、東南アジアに関する情報はやはり欧米の情報に比べると非常に少ないんですね。注目を浴びる機会も限られています。アジア諸国の理解を必要としているにもかかわらず、です。それで、今日はアジア諸国の理解をちゃんとするために、地域研究というのがとても大事だという話をします。

地域研究で何がわかるんかという話です。1枚の写真をこれから皆さんに見せます。この1枚の写真で写真をどう理解するかというところで、東南アジア研究、地域研究の力というのを、ある程度示せればというふうに思っています。

この写真です。この写真は、ちょうど10年前ですね。2007年に撮られました。ぱっと見て、真ん中に制服を着たおじさんがいて、棒を持っていますね。で、向かって左側に逃げている群集がいる。さらにここに倒れている人がいて、倒れている人の横に銃を持った兵隊らしき人がいるという、そういう写真です。

この写真を撮ったのは、アンドリース・ラティーフさんというロイター通信のカメラマンです。この写真で、2008年にピューリッツァー賞という、報道写真としては大変栄誉のある賞を受けました。

この写真は日本でも関心を集めました。出席されている方でも覚えていらっしゃる方もかもしれません。なぜなら、倒れている人、この方が日本人でした。カメラを抱えています。この人は、兵隊の隣にいるんですけど、この写真が撮られる直前にこの兵隊に銃で撃たれました。背中から撃たれて、倒れたときに撮られたのがこの写真です。実際、動画もあって、撃たれた瞬間が写っているんですが、ちょっと刺激が強いので今回お見せするのは控えました。

この倒れている人、長井健司さんというジャーナリストで、ミャンマーの反政府デモの取材に訪れていたときに撃たれました。

さて、この写真の背景を簡単に説明していきますね。

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

「アジアと日本」から「アジアの日本」へ

- 日本だけがアジアの中で特別な国ではない
- アジアは一体として動いており、日本はその一部であるという感覚の重要性
- しかし、いまだに情報量は「欧米>アジア」
- アジア諸国の理解を必要としている今、地域研究がとても大事

12

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム



15

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム



ジャーナリスト・長井健治さん

16

ミャンマーってどこにあるのかという話ですが、ミャンマーはここです。東南アジアの西の端にあります。日本から、直行便も成田から飛んでいるんですが、大体6時間から7時間かかります。そのミャンマーの第一の都市ヤンゴン。かつてはラングーンと言われていましたが、今はヤンゴンで定着しています。このヤンゴンでこの事件は起きました。

ミャンマーの基礎情報としては、人口が5100万人、国土としては、日本の倍はいかないですけども日本よりも大きくて、東南アジアで2番目。経済発展のレベルとしては、かなり低くて、東南アジアでも最低ランクです。大変貧困な国だと思ってください。これが国旗で、これがお金です。チャットという通貨を使っています。

さて、写真の背景ですが、先ほど言及しましたように、2007年の9月に大規模な反政府デモが起きていました。

背景は、原油価格の上昇による物価高騰です。原油価格が上がって、ガソリンの公定価格を政府が上げたんです。政府がガソリンの価格を決めて、その配給で皆さん車にガソリンを入れていた。ガソリン価格が上がると、物を運ぶときのコストが全部上がりますので、物の値段全体が上がります。

当時のヤンゴンでは車を買える人が少なかったんで、バスに頼って日常生活を送っていた人が多かったんですが、そのバスの運賃も値上がりしました。

それに対してすごく不満を持った人たちが、デモというわけではないですが、バスに乗らずに行進する、列をつくって行進するというのが最初に起きた出来事でした。2007年8月に起きました。



2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

ミャンマー基礎情報

- 人口: 5100万人
※東南アジアではインドネシア、フィリピン、ベトナム、タイに続く人口
- 国土: 67万7700平方キロ
※日本は37万7923平方キロ
※東南アジアで2番目に大きい国土
- 経済: 東南アジア最低レベル

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム



私は、この事件までは現地にて見ていました。何か雰囲気が悪いな、僕の後ろもちょっと私服の警察っぽい人がついてきていました。調査が終わって、8月後半に日本に帰ったんです。その後にデモが一挙に拡大して、反政府デモになりました。

日本では、政権や政府の施策に対して市民がデモを行うということは、特に珍しいことではないです。高校生の皆さんでもやろうと思えばできます。しかし、当時のミャンマーでは非常に大きな出来事でした。

なぜかという、ミャンマーでは非常に長い期間、軍事政権が続いていました。軍事政権というのは、簡単にいうと、軍隊が国を統治する政治の仕組みのことです。軍隊の最高司令官が国のトップを兼ねるわけです。ミャンマーの軍事政権では、さらにほとんどの大臣が現役か退役の軍人でした。想像しづらいかもしれませんが、そういう国が現にあったんです。1962年に起きた軍事クーデター以来です。非常に長い軍事政権ということになります。

軍事政権というのは、世界でかつていろんなところに生まれたんですが、平均5年ぐらい続いたら崩壊してしまうことが多いんです。ところが、ミャンマーの場合はやや特殊で、2007年の時点、つまり、さきほどの写真が撮られた時点で、もう45年軍事政権が続いていました。

軍事政権下では国民の政治的な自由は制限されますので、政治活動に参加したら、そのまま刑務所行きというのが珍しくありませんでした。そのため、政治的な理由で投獄された人たち、政治囚と呼ばれる人たちが大変多かったんです。3000人、4000人の人たちが、政治囚として刑務所にとらわれていました。

この軍事政権を率いたのが2人の独裁者で、この人が1代目独裁者と書きましたけども、1962年から88年まで国の統治をしていた、ネ・ウィン将軍です。これは2代目の独裁者ですが、1992年から2011年まで国を統治していた独裁者です。タン・シュエ将軍です。

ここで先程の写真に戻しましょう。軍事政権が一方にあって、ガソリン原油高、物価高騰に不満を持つ市民たちがいるので、写真の中央に境界線が引けるわけですね。軍事政権側がいて、それに対する市民側ということです。不満を表明する市民に対して、軍事政権

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

ミャンマーで長く続いた軍事政権

- 軍事政権とは軍隊が国を統治する政治の仕組みのこと
- 1962年クーデターから、ほぼすべての大臣が現役か退役の将軍たち
- 軍の最高司令官が独裁的な政治
- 世界の軍事政権の平均寿命は5年ほどなのに、2007年時点で45年も続いていた
- 国民の政治的な自由はなく、多くの政治囚

23

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

市民側 軍事政権側



25

が弾圧しているという写真に見えるわけです。

実際、そのとおりです。日本での報道も多くは、そういう見方で報道していましたし、当然こういう報道のされ方をすると、市民側に、みな同情するわけですね。非暴力的なデモに対して弾圧するなんて軍政は何てひどい人たちだというふうに思うわけです。

これは正しい理解なんですけど、ここで終わったらあきません、というのが、地域研究者の発想です。一つは、私が「立ち上がる人々問題」と名付けましたが、なぜ抗議のために街頭に出るのか、ということを問う必要があります。

高校生であれ、大人であれ、誰であれ、不満というのは常にあるわけですね。政府にどうにかしてほしいと思うことは世の中にいっぱいあるわけです。だけど、不満を表明して、解決を求めるために、なんらかの具体的な行動に移すというのは非常に難しい。仲間を見つけないといけない、調整しないといけない、同じタイミングで一緒のところに行つて行動をする、デモをするというのは、口で言うほど簡単なことではないんですね。

多くの人は、手間のかかることや危険なこと（ミャンマーの場合はデモは危険なこと）をせずに他人の行動で得られた利益、例えば、デモのおかげでガソリン代が下がるとしたら、デモに参加するリスクは追わないけれど、その成果である安いガソリンは買いに行くというのが、一番安全な人の行動です。

なので、集団で行動しないと、社会というのはなかなか変わらないんですけども、社会の構成員全員が、手間と危険を回避したら何も起きないという、ここにジレンマというか難しさがあるわけなんです。『集合行為問題』と呼ばれたりしますが、このみんながデモをするというときのデモを、不満だからやったじゃなくて、不満を行動に変えるために、どういうきっかけがあったのか、どういう原因があったのかというのを、問う必要があるわけです。

こうしたときに、新聞報道だけではわからないことがあるので、研究者自身が現地に行ったりして、調べるわけですね。

今回、デモが大きく拡大した二つの要素に注目します。

まず、お坊さんが活躍しました。仏教の僧侶です。日本だと、お坊さんがデモというのは、なかなか想像がつかないかもしれません。

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

なぜ抗議のために街頭に出るのか

- 不満は常にあるけど、不満を表明して解決を求めるための行動に移すのは難しい
- 手間の掛かることや危険なことは人に任せて、成果だけを得たいという態度も可能
- でも、集団で行動しないと社会は変わらないから、全員が手間と危険を回避したら何も起きない
- なんで人々は立ち上がったのか

29

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

理由1：活躍したのは僧侶

- お坊さんがデモ？
- ミャンマーは国民の大多数が仏教を信仰
- 30万人以上の僧侶がいるといわれ、社会的に尊敬されている
- 僧侶たちは信者の寄進を受けて修行生活
- 僧侶の政治活動は禁止されているが、若い僧侶たちが中心になって2007年デモを主導

30

ミャンマーでは、国民の大多数は仏教を信仰しています。日本の仏教とはちょっと違うんですが、30 万人以上の僧侶がいるといわれます。社会的に大変尊敬されています。日本のお坊さんも尊敬されているのは確かですけども、日本以上に尊敬されている。

この写真は寄進の様子ですね、仏教、お寺に対する寄進の額が非常に多い。なによりも僧侶の数が多いです。30 万人から 40 万人ほどいます。日本のお坊さんの数も 34 万人ぐらいなので、ミャンマーは日本の人口の半分以上なのに、日本と同じぐらい僧侶がいる、そういう国です。

僧侶たちは、信者の寄進を受けて修行生活をして、基本的に俗世間とは隔離された僧院で暮らしています。

日本と違うのは、出家者によって出家期間が 1 週間だったり、数か月だったり、一生だったり、することです。僕も友人から、ちょっと一緒に出家せえへんと軽く誘われたことはあります。日本と比べると、出家がもっと身近なものとしてあるという感じです。

僧侶の政治活動は原則的に禁止されているんですが、2007 年のデモは若い僧侶たちが中心になって主導しました。

この写真は、ふだんのお坊さんたちの活動ですけども、托鉢のつばを持って、このつばの中に食事を入れてもらって、僧院に戻ってから御飯を食べたり、あるいは、もうお寺に寄進された御飯が用意されていて、それを食べたりするわけです。僧院ではお経を覚えたり、お経の意味を学ぶわけです。

そういうお坊さんたちが、このときは街頭に出てデモをしました。この写真は、かなりインパクトのある写真ですが、この真ん中にある、赤茶系の色の帯は全員お坊さんの袈裟の色です。この僧侶の脇に、市民が手をつないで鎖のようになって僧侶を守るという形で、デモ行進をしています。

いわゆる私たちがイメージするような、プラカードを持ったりとか、そういうことはせずに、最初のほうはただ、お経を唱えながら行進をしている。でも、ミャンマーの文脈で見ると、お坊さんがこれだけの集団で行進をしているというだけで、その意味することは絶大で、政府に対するプレッシャーになるわけですね。

これが、まず人々を、よし自分もデモに参加して政府を変えてやろう、政治を変えてやろうという力になりました。

もう一つの理由は、アウン・サン・スー・チーという、知っている方も多いかもしれませんが、民主化運動の指導者がいます。1988 年から、民主化運動を指導していたんですが、長く軍事政権の弾圧下にあって、自宅軟禁、家からの外出を許されない状態を、合計、この当時で多分 11 年目になっていたはずですよ。彼女はイギリス人の旦那さんと 2 人の子供がイギリスにいましたから、家族にも一切会えない状態で、ずっと自宅軟禁下で、非暴力的な形で民主化を求めるとい運動をしていました。

多くのミャンマー国民は、彼女に対して敬意を持っているし、支持してはいるんですけど

ども、ただ彼女が指導している民主化活動にかかると、逮捕されて刑務所に送られるリスクがあるので、実際に彼女の活動を手伝うという人は少なかった。彼女の名前を発することすらためられる雰囲気でした。私も現地調査していたときは、喫茶店でもアウン・サン・スー・チーという名前は出ませんでした。周囲の人たちがちょっと振り向いたりするからですね。おばさんとか、スーさんとか、レディーとか、いろんな隠語があったんですけども、そういう言い方で彼女のことを表現しました。

その彼女が、デモ隊が彼女の家を訪れたときに、家の玄関から外に出て僧侶たちを拝みました。ここ見えますかね、ちょっと薄いですけど、ここで彼女が顔を出して、拝んでいるわけです。ここに手が見えて、頭が見えて、袈裟の色が見えますが、お坊さんがいます。自宅軟禁中なので、常に警察が彼女の家の前にはいますから警察が家を守っています。

この写真が撮られて、インターネット等で出回りました。うわさも出回った。それによって、デモがアウン・サン・スー・チーの支持も受けたということにもなって、さらに多くの市民たちがデモに参加するようになったんです。

これが、集合行為の問題、日和見ではなくて、多くの人たちが危険を承知のうえでデモに参加して政治を変えようとしたきっかけです。

ただ、まだ終わったらいけません。もう一つあるんです。

この写真をもう一度見てください。僕がこの写真を見たときに、ああと思ったのは、この兵隊なんです。この兵隊の足もとを見てもらいたいんです。草履を履いているんです。ここ。草履を履いている。

どうして町なかでデモ隊を鎮圧しようというような兵隊が草履を履いているんでしょうか。皆さんも、兵隊の立場になって考えてみてください。武器は持っています。それを撃

てば、デモ隊は逃げていくかもしれない。でも、人数的には1対100とか、1対200です。ちょっと囲まれて、後ろをとられたら、もうその時点で何をされるかわからない状態です。兵隊にとっても緊張した状態ですね。

この前線にいる兵隊が草履を履いている。これを「兵隊の足もと問題」というふうに呼びましょう。この「兵隊の足もと問題」をどうやって理解すればいいのか。

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

理由2:アウンサンスーチー



- 独立闘争の英雄の娘
- 1988年からミャンマーの民主化闘争の指導者に
- 長年の自宅軟禁下にありながら非暴力闘争を継続
- ノーベル平和賞受賞
- 1985年に京都大学にも在籍
- 僧侶主導のデモ隊に会い、その画像が広がる

35

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム



兵隊がなんで
ぞうりをはいてんの？

40

ミャンマーの伝統的な履物は草履なので、草履を履くこと自体は不思議じゃないし、この草履も見るからにミャンマーの草履なんで、ふだん履く草履です。我々が履くビーチサンダルみたいなラフな、何というんでしょうね、気楽な格好というよりも日常の履物という感じですね。

この謎を解くための鍵は、この兵隊がどこから来たのかにあります。

これは、デモ後にわかったんですが、デモ参加者に話を聞くと、なまりがあるビルマ語をしゃべっている兵隊が多くいたそうです。なまりがあるビルマ語。ビルマ語というのは、ミャンマーの公用語ですが、ミャンマーは公式で135の民族が住む多民族国家です。そのうちの多数派、6割ぐらいがビルマ族と呼ばれる人たちで、彼らの言葉がビルマ語です。学校では主にビルマ語で教えられています。

少数民族たちは自分たちの言語をそれぞれ持っています。例えば、シャンという民族がありますが、シャンはシャン語というのをしゃべりながら、同時にビルマ語もしゃべる。ある種のバイリンガルなんですけど、ただ、周りがシャンだらけだったり、家族がシャン人だと、日常会話はシャン語なので、どうしてもビルマ語がなまってしまうんですね。

そのビルマ語がなまっていたようだと。デモの鎮圧に動員された兵隊のビルマ語が、なまっていたようだというふうな証言があります。

多分、地方にいる少数民族の兵隊をヤンゴンに呼び寄せて、デモ隊を鎮圧させた可能性が高いです。

理由は単純で、ヤンゴン出身の兵隊が、ヤンゴンの市民に銃を向けるということはなかなかできない。心理的に非常にこうストレスがかかることで、やりにくいんですね。

かなり残酷なことですけど、軍隊はしばしば、ヤンゴンに何の思い入れもない、もしかしたら、ヤンゴンがどこにあるかもわからないような兵隊を、地方から連れてきて、鎮圧作戦に当たらせるわけです。

ちなみに、これが、ミャンマーの国の言語の分布ですね。オレンジの色のところがビルマ語です。それ以外の色のところは、少数民族の言語をしゃべっているところですので、いかに、周辺部に少数民族が多くて、彼らが独自の言葉でしゃべっているかというのがよくわかります。

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

ぞうりを履いた兵隊



- ミャンマーの伝統的な履き物はぞうりだが、さすがに兵隊さんは靴を履くはず
- 市街のデモ鎮圧作戦にぞうりを履いた兵隊を軍隊はなぜ動員したのか

42

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

この兵隊はどこから来たのか？

- デモ参加者によるとなまりのあるビルマ語を話していたという
- ミャンマーは135の民族が住む多民族国家。多数派のビルマ族が話すビルマ語が公用語
- 少数民族は自分たちの言語とビルマ語を話すため、ビルマ語がなまる傾向
- 地方にいる少数民族の兵士をヤンゴンに呼び寄せて鎮圧させた可能性

43

写真に写っている兵隊が、どこから来たのか正確なことはわかりませんが、少数民族地域出身である可能性は高いです。でも、それだけでは草履の理由にはならないわけですね。

もう一つ考えなければいけないのは、軍隊内の格差です。私たちは軍事政権と聞くと、とても権力を笠に着て、汚職もしまくって、お金をもうけている人たちだというふうなイメージがあります。

実際に、軍事政権下の将軍たちは大変なお金持ちで、実際の法律で決まっている給与は全然大したことないんです。将軍クラスで月20万円もいかないはずですよ。なのに、もの

すごいお金持ちなんです。他方で、ミャンマーの経済発展のレベルというのは、さっきも言ったように、東南アジア最低レベル。軍人の数は、東南アジアで2番目に多い。ベトナムに続いて多いんです。軍人の数は多いにもかかわらず、経済水準は低いので、軍に割り当てられる予算は少ない。なので、一部の兵隊、特に辺境の部隊の兵隊には、戦闘用の靴が行き渡らないんです。だから、ふだん履く草履でトレーニングしているんです。草履でトレーニングしていたほうが動きやすいので、いきなり靴履いてもちゃんと動けないから、ふだんの訓練で使っている草履でデモ鎮圧に当たらせてた可能性が高いんです。

これは、ある現地のジャーナリストから分けてもらった写真ですけども、向かって右側が司令官です。で、司令官の奥さんです。で、司令官の娘たちです。見るからに裕福ですね。

一方で、一般の兵隊。このちょっとキメ顔をしている向かって右側の兵隊が、募兵担当、兵隊を地方から集めてくる兵隊です。彼の写真を撮るよと言ったからキメ顔なんですけど、実際にこの写真をくれたジャーナリストが撮りたかったのは、その奥の子たち。彼らは、この募兵担当の兵隊に連れられて、これから新兵になる人たちです。同じ船には、こういうふうに兵隊の候補生が乗っています。

国際法的には、18歳未満は、少年兵として軍隊にかかわらせてはいけないんですけども、見るからに18歳未満の若い子たちが乗っています。彼らは強制的に連れてこられたわけではなくて、比較的貧困な農村地帯から、仕事を求めて軍隊に入ろうとしている人たちです。

だから、彼らも言ってみれば、ミャンマーの経済発展がうまくいかないことの被害者かもしれない。そういうふうに考えると、本当に、永井さんを撃った兵隊は悪と言い切れるかというと、疑問を生じてしまう。市民側、軍事政権側という、さっき最初に示したラインで、はっきり切り分けられるような単純な話ではないように思えてくるわけです。

こんな感じで、1枚の写真も我々の常識だけでは十分に理解できない。ミャンマーとい

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

軍隊内の格差

- 軍事政権下の将軍たちは大変なお金持ち
- 他方、ミャンマーの経済発展レベルは東南アジアで最低レベル。ただし、軍人の数は東南アジアでトップクラス
- 人は多いが予算には限界がある組織。そのために、一部の兵隊には戦闘用の靴が行き渡らず、ぞうりで訓練

45

う国のあり方とか、歴史とか、社会とか、経済、文化など多角的な見方をしないと、この写真が持っている意味を、十分には理解できないんですね。

こういう地域の固有性を理解するために、地域研究というのは大変有効だというのが言いたいことです。次に、自分の話をします。

最初に、「何でまたミャンマーを研究しようと思ったんですか」という質問をよく受けます。私自身は、顔が東南アジア系の顔をしていますので、ミャンマー人ですかとよく言われるんですが、違います。日本人です。

学生時代、映画のシナリオライターになりたかったんですけど、才能ないなと思って諦めて、大学3年のときに、東南アジアのゼミに出たことをきっかけに、発展途上国や東南アジアについて研究したいなと思って、京大の大学院を志望しました。

京大での大学院生活で与えてもらった自由にはふたつあります。一つは、通念からの自由ですね。学生るとき、僕は民主主義とはいいいもんだと何となく思っていたんですが、京大に来て、いろんな先生と話すと、本当に民主主義っていいのか、民主主義ってどういう条件でいいのか、例えば、民主主義じゃない国は本当にだめなのか、シンガポールは民主的じゃないけども十分経済発展している、あれでどうしてあかんのか、というふうな議論が日々行われています。それにちゃんと答えられない自分がいたんですね。通念から自由になって、通念の束縛を離れて、ちゃんと自分で説明できるようにならないといけないと思わせてくれました。

もう一つの自由は、私がミャンマーの研究をしたいです、軍政下で調査したいですと言ったときに、やめときと、何かあったときに責任とらないかんから嫌やという先生が京大には誰1人いなかった。先生方は、行ってこい、その代わり責任は自分でとれというふうに言ってくれました。無責任ととれなくもないですけど、とりあえず行ってこいと言ってくれたことは、非常に大きかったです。

実際にミャンマーに行って、2年ぐらいヤンゴンに滞在しました。渡航した時点ではビルマ語は一切できなかったのですが、ビルマ語の勉強を週5日間、午前中にマンツーマンで2時間授業を受けて、その予習復習でほぼ午後はつぶれるという生活を約1年ぐらい続けました。ビルマ語しか通じない環境に自分を置いて、日本人とはなるべくつき合わずに必

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

こんな感じで

- 1枚の写真を理解するためだけでも、ミャンマーという国のあり方や歴史、社会、経済、文化など多角的な見方をしなければならない
- そのために各地域が持つ固有性に着目する



50

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

なんでまたミャンマー？

- ミャンマー人ではありません
- 映画のシナリオライターになりたかった
- 大学の3年生から政治学と東南アジアに関心を持ち、京都大学で研究をスタート
- 京都大学からもらった2つの自由
 - 通念からの自由：民主主義って？
 - ミャンマーというフロンティアへの挑戦を後押しする自由さ…責任は自分でとりや

52

死にやりました。伝わらなくても、間違っても、とにかく話すしかない。

ビルマ人、結構性格いい人が多くて、わかってないのにうんうん、うんうん言ってくれるんですね。だから、さっき答えたはずの質問がもう一回来て、「ああ、伝わってなかったんだ」とがっかりする、そういったことを繰り返す日々でした。

ちなみに、ビルマ語というのは、こういう言葉です。目の検査に使う記号みたいなんです。上に書いてるのが「ミャンマー」です。下には「かなざわ」と書いてあります。ここが「か」で、ここが「な」で、ここが「ざ」で、ここが「わ」なんです。こういう文字を、一からやって、読んだりしゃべったり書いたりしたわけですね。

次の写真は文書館での写真です。軍隊の公文書を集めた図書館みたいなところがあるんですが、その図書館に行って、軍隊の昔の文章を読んでいました。

この写真では、私がスカートみたいのはいていますが、これはロンジーといって、ミャンマーの伝統衣装というか、日常着なので、2年間このロンジーをはいて過ごしました。ちょっと女性の気持ちがわかるようになりました。

この写真は、昔の政党の幹部だった人にインタビューしたときの写真ですね。ホテルの一室でやりました。

これは昔の首相の娘さんとの写真です。この方が娘さんです。この人は彼女のお孫さんで、今日本で勉強をしています。

そうやって書いた博士論文を本として出版しました。結構苦労した成果を出版して、いろんなことを書いたんですが、本の最後で、この軍事政権というのは、まだ安定しているから、これはしばらく続くよ、というふうな予想をしました。そしたら、見事に予想が外れてしまって、2011年以降に一気に自由化が進みました。

あんなに弾圧されて、かわいそうだといわれていたアウン・サン・スー・チーも政治活動ができるようになって、2015年の総選挙では、彼女の政党である国民民主連盟（NLD）が勝利して与党になってしまいました。

全く予想が外れたんですが、別に失望する時間もなくてですね、何で予想が外れたのか、何を見逃していたのか、これからどうなっていくのかというのを、今勉強して、調べてい



2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

予想外の出来事から次の課題

- どうして外れたのか、何を見逃していたのか、これからどうなっていくのか。
- 50年ぶりに訪れた自由をミャンマーの人々がどのように使いこなしていくか。
 - 言論の自由は拡大
 - 自由に組織をつくってもよい
 - 宗教的な対立をおおるような表現が広がり、一部では暴力的な対立に発展

61

っているところです。

2011年以降のミャンマーでは、言論の自由が拡大して、自由に組織をつくってもよくなったんですが、自由になるとそれはそれで困難が生じます。例えば、宗教的な対立をおおるような表現が広がって、一部では仏教徒とイスラム教徒との間での暴力的な対立に発展しました。政府もコントロールがきかないところまで一部の地域では来ています。約50年間なかった自由を、これからミャンマーの人たちがどうやって使いこなしていくのか、今関心をもって見ていることです。

この写真に写っている人は、政党の活動家です。地方の政党の活動家に話を聞きに行ったり、これは、選挙活動についていって、選挙活動の様子を眺めたり、この後ろのほうに、村人に投票してねといっている活動員がいますね。これは、政治家に喫茶店で話を聞いているところです。

さて、最後、無理やりまとめますと、1990年代、多分ここにいる高校生の皆さんが産まれる前ですが、私もまだ子供のころですが、冷戦というのが終わって、これからは自由民主主義と資本主義が世界的に広がっていくだろうと、やや楽観的な見方がありました。実際のところ、東南アジアでも2000年代以降は、民主化は大して進んでいません。むしろ、タイは軍事政権に逆戻りしてしまいました。

我々が思っているほど、民主的で平和な状況がどこでも同じように発展するといった認識は、もう既に誤りということを、私たちはわかっているんですね。だからこそ、その国その国独自の発展の原理みたいなものを突き詰めていかなければ、調べていかなければいけないというふうに思います。

最後に、その不確実な時代だからこそ、今言ったことですが、各地の固有性に着目したリアルなアジアを見定めたいというのが、私のモチベーションですし、同じような気持ちで研究をしている人が京大にはたくさんいます。



2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

アジアの時代、不確実性の時代

- 1990年代にあった楽観論：冷戦が終わり、自由民主主義と資本主義が世界に広がる
- 確かに、アジアでも民主化進んだ
 - 1986年フィリピン、1987年韓国、1991年タイ、1998年インドネシア
- 2000年代以降は民主化は思ったほど進まず。タイでは軍事政権が誕生
- 独裁者のいる状況から民主的で平和な状況へ一直線に発展するという発想の単純さ

66

2017年3月11日 第12回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

最後に

- 不確実な時代だからこそ、固有の発展経路に着目した「リアルなアジア」を見定めたい
- 善悪の価値観に縛られずに好奇心で動くことが大事。それを許してくれるのが学問であり、京都大学の自由風格（フリースタイル）
- 「なんでミャンマーで生まれたのかな」という友人の言葉
- まだ東南アジアは遠い地域だと思いますか？

67

軍政だから、悪い人たちだから、別に研究する価値ないわじゃなくて、軍政という、私たちの政治的な環境とは全く違う人たちがいるところだからこそ、むしろ積極的に行って、その好奇心をもとに、いろいろ調べていくというのが大事なんだと思います。それを許してくれるのが学問であって、京都大学のフリースタイル（自由風格）なんだろうなと思います。

もう一つ自分の研究のモチベーションとして常にあるのは、友人から、そんな貧しいわけではないんですけども、車のドライバーをしている友人がぼそっと、「何でミャンマーで生まれたのかな」とつぶやいたことがあります。これ、同じような言葉をミャンマー人の何人かから聞いたことがあるんですが、彼らが言いたかったのは、自分がミャンマーで生まれなければ、こんな境遇じゃなかったんじゃないだろうかということです。

本当に自分がコントロールできない、どのタイミングで、どの家族で、どの国で生まれたか、それで自身の人生のほとんどのことが決まっているような気がしてならない。そう思うと、自分があちらの国、ミャンマーで生まれたとしても、自分なりに納得できるような人生が送れるような国にするために協力したいと思うわけです。

まだちょっと、東南アジアは縁遠いと思われているかもしれませんが、実は、私は父親が石川県出身でございまして、今、白山市になっていますが、鳥越村というところが出身です。この写真のこれって書いてるのが、私が10歳か9歳か、それぐらいのときの写真です。この時代は、ミャンマーにも外国にも全く興味がなくて、少年野球をやっていたので野球のことしか考えていませんでした。鳥越村に来ると、自然が広がって、もう朝から晩まで走り回っていました。

そういう子供が、10年、20年後にはミャンマーの研究をしているわけです。自分がいまどこに住んでいるからとか、どういうことをやってきたからということに縛られずに、自分の好奇心を信じて、自分のやりたいことに突き進んでいってもらえればというふうに思います。

ただ、突き進むのは受験が終わってからのほうがいいかもしれません。大学行ってからのほうがいいかもしれないですけど、あまり早くに突っ走り過ぎないように、それなりに人の話も聞きながら、突っ走ってください。

ご清聴ありがとうございました。